

『明日、宇宙人になります』

美崎 理恵

《登場人物》

辰人

名古屋

持田

茂の母

見張りの男

《背景》突然体が痒くなり、病院で検査を受けた結果、地球に存在するはずのないDNAが発見される。そのような事例が今、世界中から報告されている。いつ、どこで、どうやって、地球外のDNAを持ってしまったのか。全世界が解明に全力を注いでいる。

小高い丘の上にあるコンクリートの古い建物。DNA検査の結果を待つ人々が集められている待機所である。翌日、検査結果が出るまで、人々はここで一夜を過ごす。そのテラスが舞台。

夜。ベンチや椅子がいくつもある。

辰人がベンチに座って茶封筒に宛名を書いている。

名古田は少し離れたベンチでうなだれている。

見張りの男は、携帯で話をしている。

見張りの男(以下、男) はい、異常なしです。はい。はい。では。

見張りの男、携帯電話を切ってポケットに入れる。

辰人、宛名を書き終えて、封筒を見張りの男に渡す。

辰人 はい、お願い。

見張りの男、封筒を受け取る。触ってみて、

男 ん？ 中、入ってます？

辰人 いいの。

男 空で出すんですか？

辰人 そ。書留でお願い。

男 書留。

辰人 ポスト入れちゃダメだよ。郵便局から出してね。

辰人、財布を出して、中からカードを取り出して見て、

辰人 向こうでカードって使えんのかなあ。

男 さあ。どうなんでしょうね。

辰人 (カードを財布の中に入れて) あー、ちょうど、ないや。ちょっと待ってて。くずしてくる。

辰人、退場。

名古田、辰人が去ったのを見て、

名古田 中、入ってないんですか？

男 はい？

名古屋 封筒の中。

男 ああ。はい。

名古屋 どうしてでしょうね。

男 さあ。

名古屋 書留で出すんですよ。

男 書留ってどんなでしたっけ？

名古屋 ほら、いつ手紙を出して、いつ受け取ったかがわかる。

男 ああ。受け取った時にハンコ下さいと言われる、

名古屋 そう、面倒くさいやつ。でも、それだけ大切な手紙ってことですよ。なのになぜ中身がないんでしょう。

男 さあ。でも本人がいろいろ言うんですから。

名古屋 あれですかね。別れの手紙ですかね。

男 まだ、結果は出てませんよ。

名古屋 あなた、もしかして、私を気遣ってくれてるんですか？

男 いいえ。事実を言ったまです。

名古屋 はは……。

男 明日にはわかりますよ。わかれば楽になります。

名古屋、溜息をつく。

名古屋 いつもそんなことしてるんですか？

男 はい？

名古屋 そういう、手紙を出したりとか。

男 頼まれたら。

名古屋 あなたも大変ですね。

男 そうでもないです。無理なことは無理と言いますから。

名古屋 その……最後の願いを叶えてあげる、的な優しさですか？

男 はい？

名古屋 (宇宙人地区を見て) この人たちは、明日、あっちへ送られて行くんだ、可哀想にっというーあー、なんでなあ……。 (うなだれる)

辰人が戻って来る。見張りの男にお金を渡す。

辰人 はい、ちょうどあつから。

男 (数える) 519円。

辰人 基本料金84円と書留435円。イコール519円。郵便局ね。ポストはだめ。

男 はい。

辰人はベンチに戻る。

見張りの男は提げているカバンにお金と封筒を入れようとして、「ん？」と封筒を見る。差出人の名前がない。見張りの男、どうしたものかと考える。それにかぶせて、名古田、辰人に近づき、

名古田 言ってたよ。

辰人 ん？

名古田 なんで書留なんだって。知りたがってた。不審がってた。

辰人 へー。

名古田 それなのに中、空っぽだろ。不思議だって。気にしてた。どうでもいいだろうにね。

辰人 はは。

男が辰人に声をかけようとする。が、名古田が話を続けるので諦めて、封筒をカバンの中に入れる。

名古田 ラブレターかな。

辰人 は？

名古田 ラブレター。

辰人 ラブレター、古っ。

名古田 いや、そういう君も、書留って最近使わないよ？

辰人 そうかなあ。

名古田 ああ、あれか。お別れです。さようなら、的なーああ、気持ちはわかるよ。わかる。

だって明日からは、

辰人 お別れにいいのかなあ。

名古田 え、大丈夫って思ってる？

辰人 痒みが来た時はヤバいつて思ったけど、

おさまってるよね。違うかもって思うよね。でも、かゆみ止め打ったからだから。治

ったわけじゃないから。

辰人 鮭の塩焼きを食べたんだ。

名古田 は？

辰人 鮭の塩焼き。相性あんまり良くないんだけど、もうなんかすっごく食べたくなって思わず食べちゃった。だからかなあ。

名古田 そう思いたいだけでしょ。

辰人 うまかったなあ。

名古田 うまいよ、鮭の塩焼きは。うまいよ！ めっちゃうまいよ！  
辰人 どした？

名古田 いいね、うまかったって言えるものが最後の食事になって。私なんかほら、時間に余裕がない時に急ぎお腹に入れる、あれだよ、あれ、チュチュチュッと吸う、はいはいはい、あれね、いいんじゃない？

名古田 どこが。

辰人 栄養バランス抜群。

名古田 最後の食事だよ？ 栄養とかじゃないでしょ。

辰人 俺もそういうのにしときゃよかったな！

名古田 本当にそう思ってる？

辰人 思ってるよ。

名古田 思ってるないだろ。適当だろ。

辰人 思ってるよ。

名古田 思ってるないよ！ 絶対思ってるない！ ちくしょー……。

辰人 へへ、意味わかんない。

名古田 ちくしょー……。

名古田、うなだれる。

辰人、宇宙人地区の方へと進み、見つめる。

男 あの。

辰人 ん？

男 (封筒をカバンから出して) これ、あなたの名前がないんですけど。

辰人 いいの。

男 でも、

辰人 いいんだって。

男 ……。

男、納得はしていないが、封筒をカバンの中に入れる。

辰人 なんも見えない。

辰人、元の場所に戻る。

名古田 ねえ。

辰人 ん？

名古田 痒み、どこに来た。

辰人 ふくらはぎ。

名古田 ふくらはぎ。

辰人 チャリ乗ってて、なんか痒いなあと搔いてたら、あつという間に太ももの辺りまで痒くなつて、で病院行ったら、「はい、検査しまーす」って。

名古田 私はね、首。会議中に急に痒くなつて、(首を指差し)ここ、ここが痒いなんてものじゃないんだ、もう、こう、ポリポリポリポリ。そしたら、部屋の中にいた人間がみんながちよつとずつ私から離れていったという……。

辰人 仕方ないな。

名古田 やつこの思いで築き上げてきたものが、その瞬間、みんな崩れ落ちて行つたよ。手柄、全部、田畑が持つていくんだ……。ちくしょー、田畑あ……。

辰人 人生っちゃあ、そういうもんだ。

名古田 若造が人生なんて言葉、軽々しく使わないでくれるかなあ。

辰人 ああ、ごめん、どう使やあいい？

名古田 は？

辰人 そうか。重々しく使うよ。

名古田 ……そういうのやめよう。

辰人 そうなの？

名古田 ああ、わかつてないくせにわかつたふりするの。

辰人 ああ、わかつた。

名古田 え？

辰人 わかつた。

名古田 ……わかつてないだろ。

辰人 わかつてるわかつてるー！

名古田 だからそういうの！

辰人 了解！

名古田 だからあー！ あー腹立つなあ！ 一緒にいるとイライラするタイプだよ。

辰人 (笑って)俺が？

名古田 私は誰と喋ってるんだよ！

辰人 わかつたわかつた。

名古田 だからあーちくしょー……。

辰人、笑う。

持田が登場。

持田 こんにちはー。

持田、あちこち遠くを見渡す。

持田 (男に) えーっと、宇宙人地区は？

男 あっちです。(指す)

持田 (見て) 見えませんね。

辰人 朝になったら見えんじやない？

男 山に隠れているので。

辰人 明るくなっても見えないの？

男 はい。

辰人 なーんだ。

持田 でも、うっすらぼんやり明るい。宇宙人地区の明かりですか？

男 はい。

持田 (笑顔で) そっかあ。

辰人 え、なんか、嬉しそう。

持田 見えないぶん、楽しみ倍増だね。

名古屋田 (咳く) うそだろ。

持田 (辰人に) 君も結果待ち？ っていうか、みんな結果待ちだよね。

辰人 あの人は違う。見張り番。

持田 見張り？

辰人 逃げ出さないように。

持田 逃げる人いるんですか？

男 たまに。

持田 へー。

名古屋田 (咳く) 逃げたいよ、逃げられるもんなら……。

辰人 (名古屋田の言葉を聞き) 逃げたらどうなの？

男 逃がしません。

名古屋田 訊くなよな！

辰人 ははは。

名古屋田 ほんとイライラするよ。

持田 (宇宙人地区を見ながら) 明日はあっちかあ……。

辰人 行く気満々だね。

持田 うん。なりたかったんだ。ウルトラマン。

辰人 は？

持田 なれないと思ってた。だって彼は宇宙からやって来るんだから。あの真っ暗な闇の彼方から。でも違ってた。宇宙人はあっちから来るのではなく、こっちに存在した。

驚きだよな。

名古田 (眩く) 何言ってるんだか……。

持田 やっぱ痒くなった？

辰人 うん。

持田 どこ？

辰人 足。

持田 (名古田) あなたは？

名古田 首。

持田 僕は指。指痒いのつてもうたまらないんだよ。どの指のどこが痒いのか全然わからないんだ。痒みの的を得てないというか、搔いても搔いても搔きたい所に行き当たらないというか、でもまさか夢の中で痒みが発生するなんて思ってもみなかったからびっくりというかなんというか、面白いだろ？

名古田 面白い？ 状況わかってる？

持田 あのですね、これは、そんなに悪い話じゃないですよ。

名古田 君、大丈夫か？ 私たちは明日、隔離されるんだよ？

持田 それは、今何が起きているのか、全くわかってないからですよ。なぜ、人間が持っているはずのないDNAを持つってしまったのか。いつ、どこでどうやって持ってしまったのか。この先、痒みはどうなるのか、また人間に戻ることができるのか、全くわかっていない。だから隔離せざるを得ないんです。でも、これから研究が進めば、やがて見えてくると思いますよ。これは地球を助けるために起きている現象だって。

名古田 は？

持田 人類は色んなものを相手によくここまで闘ってきました。その闘いは自らが生み出してしまったものなんですけどね、もうお手上げなんですよ。文明では解決できない、人間の力が及ばない領域に入ってしまったんです。人類が地球をコントロールすること、できなくなってしまうんです。そして闘い疲れて、行きつくところまで行きついてしまった結果、人間は進化し始めた。

辰人 マジで言ってる？

持田 もちろん。

辰人 じゃ俺は、人類を救うために宇宙人になった？

持田 うん。

辰人 かつこいし、すごい！ ははは、あんた、小説家になったら。

名古田 幸せな人だ。その発想の意味がわからない。

持田 そう思わないあなたの発想の意味がわからない。

名古田 私が人類を助ける？ 何言ってるの？ 私が助けてほしいよ！ うだつの上がないサラリーマンが、やっとプロジェクト成立までこぎつけて、さあ、最後の一步を踏み出そうと思ったら(首を指差して)ここ、痒くて痒くて。私のサクセスストーリー

はどこへ行ったんだよ、これからだったのに！　いまや全部、田畑の功績だよ！　もう、なんでなあ、ちくしょー、田畑あ……。

辰人　田畑、感謝してるよ。

名古屋田　なんで君はそう私をイラつかせる。

辰人　俺が？

名古屋田　ほら、そうやって。

辰人　は？

名古屋田　バカにしてるだろ！

辰人　してないしてない。

名古屋田　してるよ！　田畑と似てるよ。そっくりだよ！

持田　もうやめましようよ。

名古屋田　あんたもそうだよ！　私をバカにしてー！

持田　持田です。

名古屋田　……は？

持田　名前。持田と言います。

名古屋田　……あ……名古屋田と言います。

辰人　辰人と言います！

持田、見張りの男を見る。

男　私ですか？

持田　はい。

辰人　名前。

男　警備員です。

持田　名前。

男　警備員と呼ばれています。テラス南側の警備員。テラス南側の見張り番。

持田　名前です。

男　……田畑と言います。

名古屋田　田畑あー……。

辰人　ははは！

名古屋田　ちくしょー……。

持田　名古屋さん。僕たちは必然的に宇宙人になったんですよ。宇宙人になる必要があったんです。だから誰かに怒りをぶつけても、悲しみに暮れても――すみません。

辰人、持田、名古屋田、見張りの男を見る。

男 皆さんが今日行った検査は、地球に存在しないDNAを持っているか持っていないかの検査であって、宇宙人が宇宙人でないかの検査ではありません。でもテレビもネットもみんな言ってるよね、陽性だったら宇宙人だって。

男 それは、地球外DNAを持ってしまったからで、

持田 だから、宇宙人じゃないですか。

男 宇宙人という言葉が先行しているだけなんです。

辰人 意味わかんない。

名古田 じゃ世間にそう言って回ってくれる？ 言葉が先行してるだけで、この人たちは宇宙人ではありませんって。

男 言っている人がいたら、言っておきましょう。

名古田 言わないな。絶対言わないな。

持田 田畑さんは怖くないんですか。自分もいつかうつるんじゃないかって。

男 うつるものではないので。

辰人 今のところはね。でも解明されたらわかんないよ？

男 仕事ですから。

名古田 もし宇宙人になったらどうする？

辰人 こんな仕事してたら、なる確率高いと思うよ。

男 仕事ですから。

辰人 ははは、なんかやべっ。

持田 だいたい何パーセントぐらいですか？

男 はい？

持田 ここに送られて来た人たちが地球外DNAを持っている確率。

男 さあ。私は警備員なので。

名古田 私たちに気を遣ってるんですよ。可哀想で言えないんですよ。宇宙人になってしまった哀れな人たちって、そう思ってるんですよ。ね。

見張りの男、答えず。

名古田 ほら、やっぱりそうだ。

男 もう数時間後にはわかることですから。わかったら楽になります。

名古田 その数時間が苦しんだよ。ああ……。 (うなだれる)

辰人 宇宙人ねー。俺は大丈夫な気がするんだなあ。なっていないような気がする。

名古田 気がするだけだよ？

辰人 だって俺、なんにも変わってないもん。昨日までの俺といっしょ。痒みが出ただけで、ほかは異常なし。やっぱさ、鮭の塩焼きだと思うんだよね。

持田 痒みの原因？

辰人 うん。もっちは？

持田 もっちは？(笑って) もっちはね。

辰人 なんで痒くなった？ 何してる時になった？

持田 僕はね、夢を見てる時に。

辰人 夢？

持田 いい夢だったんだなあ……。ピアノ、弾いたことある？

辰人 学生の頃にちょっと。猫ふんじやった。

持田 名古田さんは？

名古田 弾けないけど、真似程度なら、若い頃。

持田 田畑さんは？

男 弾けます。

辰人 上げえ、弾けんだ。

持田 いいなあ。僕はまだ一度も弾いたことがないんだ。

辰人 一度も？

持田 うん。触ったこともない。

辰人 マジか。

持田 いつも誰かが弾くのを、部屋の隅っこで眺めてた……。ピアノはいつも人気でね、弾けても弾けなくても、みんなピアノの周りに集まっていた。そんな中でピアノに近寄る勇氣なんかなくて……。

辰人 なんて。

持田 僕はね、施設で育ったんだ。

辰人 施設。

持田 そこには、誰もいなかった……。広い部屋の中央にピアノが一つぽつんと置いてあって、ここなら弾ける、そう思った僕は、ドキドキしながら鍵盤の上に指を置いて、初めて自分のピアノの音を聞く……。 (聞こうとする) と、(手のひらを見る) この深いところから何かが湧き出てくる感覚があって、目が覚めた時にはもう、掻きむしってた。

持田 そう！ 嬉しかったなあ。僕もいよいよ宇宙人だって。

辰人 地球を助ける時が来たって。

持田 そう！

辰人 面白い！

辰人と持田、笑う。

名古田 何が？ 何が面白いんだよ！

『明日、宇宙人になります』

茂の母、登場。

男 あ、これはこれは。

茂の母 (以下、母) (見張りの男に) どうも、こんばんは。  
男 どうも。

母 (持田に) こんばんは。

持田 こんばんは。

母 (辰人に) こんばんは。

辰人 (チヨコンと頭を下げる)

母 (名古田に) こんばんは。

名古田 (丁寧に頭を下げて) こんばんは。

茂の母、迷うことなく、宇宙人地区の方を見る。

母 ああ……誰かあの山を削ってくれないかしら……。

男 今日はどちらが？

母 今日はここが。(左ひじを指差して、軽く搔く)

男 そうですか。

母 今日中はいっぱいですね。

男 最近また人数増えてますからね。

母 そうですね。

男 あ、そうだ。すみません、ちょっとお訊ぎしていいですか？

母 なあに。

男 差出人の名前がなくても手紙って届きますかね。

母 差出人の名前？

男 はい。

カバンの中から辰人の封筒を出して、茂の母に見せる。

辰人 おい！

男 届かなかったら困るので。

辰人 届くって。

母 あなたのお手紙？ 名前を書かずに出すの？

辰人 大丈夫だから。気にしないで。

母 どうして書かないの？ 礼儀よ？ 差出人の名前なくちゃ、もらった人困るんじや

ない？

辰人 困らないの。

母 誰から来たのかわからない手紙なんて、私は開けるの嫌よ？

辰人 あんたはね。

名古田 私も嫌だね。

持田 僕は気にせず開けちゃいますね。

母 でも、この人、わざとよ？ そうでしょ？ どうして書かないの？

辰人 どうして？ どうしてそれをあんたに言わなきゃなんなの？

母 だって、あるべきものがないっていうのは気になるでしょ？

辰人 気にしないでいいの。書いた本人が気にしないって言うってんだから、あんたがわざわざ気にする必要はないの。

と、茂の母、見張りの男の持っている封筒を手取る。

辰人 おい！ 人の手紙見んじゃねーよ。

辰人、封筒を取り返し、見張りの男に渡す。

辰人 ちゃんとしまっとけよ。

男 名前書かずに郵便局、引き取ってくださいかね？  
辰人 くれる。

持田 ポストなら書かなくてもOKですよ。

辰人 ポストはだめ。

名古田 書留で出すんだとき。

母 あら、じゃやっぱり名前書かなきゃ。何かあった時に戻って来ないわよ。

辰人 戻って来なくていいの。

持田 じゃなんのために書留で出すの？

辰人 いいじゃん。もっちゃんには関係ないだろ？

男 差出人の名前なしで郵便局、引き取ってくださいかね？

辰人 くれるって。

母 くないわよ。

辰人 あのね、「戻って来なくてもいいです。それを承知で出すんです」って言ったら、向こうが「ああ、そうですか」って言うから――

母 そんなことあるの？

辰人 あるの。

男 ありますかねえ。



持田 お父さん？  
名古田 お父さんに毎日？  
母 いつから？  
辰人 ……。  
持田 (言うように促す仕草)  
辰人 ……二ヶ月前。  
母 まあ！  
持田 お父さんはわかってるの？ 辰人君からって。  
名古田 字を見りゃわかるんじゃないの？  
辰人 息子の字がわかるような奴じゃないよ！  
名古田 な、何をそんなに怒るんだよ。  
辰人 もう……放つといってくれよ……。  
母 あなた。手紙っていうものはね、相手の顔を思い浮かべながら綴るものなの。一文字一文字丁寧に、思いを込めて。それは他人も親もいっしょ。いいえ、親ならなおさら子ならなおさら。それなのにこんな意味不明の手紙を送りつけて、あなた、お父さんの気持ちになったことある？ お父さんが毎日どんな気持ちでこの手紙を受け取っているか——  
辰人 うっせーよ！ なんで俺が親父の気持ちになんかやなんねーんだよ。あんた、俺の親父知ってんのかよ！ 知らねーだろ？ 知らねーくせにぐだぐだぐだぐだ言うんじゃねーよ！ っていうか人の手紙見んじゃねーよ！  
母 このわからず屋のバカ息子！  
茂の母、無然と退場。  
持田 あーあ、怒っちゃった。  
辰人 なんなんだよ、偉そうに。  
男 茂の母です。  
名古田 茂の母？  
男 茂という息子がいるんですよ。いつも、その息子のことばかり言ってるので、いつの間にか、茂の母と呼ばれるようになりました。  
持田 茂は？  
男 (宇宙人地区の方を見て) 向こうへ。一ヶ月前に。  
名古田 で、なんで母親がここに？  
男 結果待ちです。  
持田 母親も地球外DNAを。  
男 ふりです。

持田 ふり？

男 痒くなったふりをして検査を受けて、この待機所にやって来るんです。そして翌日、家に戻される。その繰り返しです。いつか茂の元へ行けると信じて。

名古屋田 まいったねえ。

辰人 はは、茂は喜んでんじゃないかね？ ママから解放されて。

持田 僕はそういうのわからないなあ。縛るもの、何もなければね。身軽で気楽。目の前の状況に応じて一人で考え、一人で生きて行く。目の前には我が道のみ。

辰人 いいよ、もっつい、そういうの。

名古屋田 仕事、何してんの。

持田 フリーのライターです。世界中を旅して記事を書いたり、写真を撮ったり。

名古屋田 趣味が仕事になったって感じね。

持田 まあ、見方によってはそうですね。

名古屋田 だから地球外DNAを持ってても余裕なんだな、はは。

辰人 楽しい？

持田 うん。行った場所で色んな人に出会えるからね。それもその場限りの出会いで、お互い深追いしないし、なんていうか、シンプルなんだな。

名古屋田 さよならを言わなきゃならない人はいないわけだ。

持田 そうですね。

辰人 いいなあ。その、深みにはまらない人生っていうものに憧れんなあ。ライターねえ。俺もバイト辞めてそういう勉強してみよっかなあ。

名古屋田 バイト、もう戻ることはないよ。明日にはあっちなんだから。

辰人 あっち行ったらそういう仕事探すかなあ。

持田 一緒に探そっか。

名古屋田 ちょっと待ってよ。おたくら、お気楽過ぎだよ。今置かれている状況、わかってる？

辰人 ごだちゃん。

名古屋田 ごだちゃん！？

辰人 そんなに機嫌損ねないで？

名古屋田 やっぱり君は、私をバカにしてるよ。

辰人 してないよ。

名古屋田 事の重大さだって、わかってない。

辰人 わかっているよ。テレビもラジオもネットも朝から晩まで地球外DNA、宇宙人ってそればっかだよ。

持田 昨日もテレビで特番してたよね。

辰人 見た。

名古屋田 討論会でしょ？ 私も見たいよ。

辰人 医者と、SF作家と、もう一人、誰だっけ？

持田・名古田 生物学者。

辰人 そうそう。

名古田 あれ見たらもうめっちゃ怖くなって、地球外DNAなんか絶対持ちたくないって思ったよ。それが昨日で、もう、今日ここだよ。どうなってるんだよ、まったく……。

持田 特番っていつても、問題提議するだけで答えなかったしね。

辰人 会話、全然噛み合ってなかったもんなー。

と、辰人が医者に、持田がSF作家に、名古田が生物学者になる。

持田 誰もが、宇宙人は宇宙からやって来ると思ってた。でも違ったんだよね。宇宙人は地球の中から生まれた。なんてスベクタクルな展開なんだろう。

辰人 いや、スベクタクルでもなんでもないでしょ。何がスベクタクルなんですか。全身が痒くなった。そして地球外DNAを持ってしまった。宇宙人になってしまった。つまり、これは医学なんですよ。病気なんですよ。それをSFにしちゃだめですよ。

持田 え、宇宙人は病気だって言うの？ バカ言っちゃいけないよ。地球に存在しないDNAを、人類が持っているはずのないDNAを持つてるんだよ？

辰人 だから医学的に――

持田 今の医学は人類限定なんだよ？ そんなんで考えている限り、解決できるわけがない。これはね、地球が地球という存在から脱皮し、宇宙という世界へ突入する――

辰人 なぜ話をややこしい方へ広げようとするんですか。なぜ解決できない方向へ、わざわざ持って行くこうとするんですか。これは新種の病気なんですって。全身が痒くなる病気。皮膚科。もしくは内科。もしくは神経内科。

名古田 違いますよ。これはバイオロジ。ケミカルバイオロジ。化学遺伝学。ケミカルゲ

ノミクス。つまり、生物学の発見なんです。

持田 ンもうー、だから、なんで未知のものを自分たちの知識の中で解決しようとするかなあ。

名古田 してないじゃないですか？ 言いましたよね今。これは発見だって。私たちの知識を超えた、驚くべき発見――

辰人 病気です。驚くべき病気、痒みが引き起こしている――

持田 いや、そういった説明のできるものじゃないんだって。理解できない、空想の世界に、人類は迷い込んでしまったんだって。

名古田 いやいやそうじゃなくて、バイオロジ。ケミカルバイオロジ。化学遺伝学。ケミカルゲノミクス。つまり、生物学の発見、発見なんですよ。

三人、意見をそれぞれ喋り出し、(これまでのセリフの繰り返しでよい。ひたすら主張をする) やがてヒートアップし、最後には笑い出す。見張りの男も笑っている。

全員 はははは！

辰人 あれ、答え出す気なかったよな。

名古田 そ、討論楽しんでるだけ。

持田 この先みんなどこへ行くのやらー。

全員 はははは！

と、茂の母が戻って来る。手にはペンを持っている。見張りの男からカバンの中の封筒をもらい、椅子に座り、封筒に何かを書こうとする。辰人、気づいて、

辰人 おい！

辰人、茂の母から封筒を奪う。

辰人 何すんだよ！

母 名前を書いてあげようと思って。

辰人 人の手紙、勝手に触るなよ！（封筒を見張りの男に渡す）なんで渡すんだよ！ しまえよ！

母 ちゃんと名前ぐらい書きなさい。

辰人 あんたは茂のことだけ考えてりゃいいの。

母 あなたのような息子を持つて、お父さん、お可哀。

辰人 親が親だからこんな息子なんです。

母 どんなお父さんの？

辰人 関係ないだろ。

母 私にはね。でもあなたにはあるの。よく考えて。明日はあつちよ。

名古田 ああー……（うなだれる）夢であってほしいよなあ。明日、目が覚めたらいつものように横に妻が寝てて、「おい、朝だよ」って言ったなら「あと八分寝させて」って……。もうあの時間は戻って来ないのかなあ。

母 戻って来ないわ。

持田 そんな脅すようなこと言わなくても。

母 だって、本当に戻って来ないんですもの。希望を語るより、現実を受け止めることの方があなたのためになるの。

名古田 家を出る時、母に言われたんです。「カルシウムが足りないってお医者さんに言われたのよ。だから牛乳と小魚、帰りに買って来て」って。

母 きっと代わりにどなたか買って来てくださるわ。

名古田 母は健康オタクで、でも牛乳嫌い……。やっと牛乳飲む気になったんです。

母 よかったわね。

名古田 父は口数は少ないんですけど、穏やかな人で、いつもニコニコ笑ってて……。

母 ご結婚は？

名古田 (指輪を見せて) 嫁が一人。両親と同居してて、ちょっとやさっとじゃへこたれな  
い、強くて、面白くて、いい嫁です。

母 別れの挨拶はできたの？

名古田 ここに入る前に電話で話せたので。

母 よかったわ。連絡の取れないまま向こうへ行ってしまう人もいるって聞くもの。

名古田 両親は普段、電話には出ないんです。引っかけやすいんです。前に一度引っかけ  
たことがあって。

持田 詐欺？

名古田 五〇〇万。

一同 (驚きの声)

名古田 だから電話嫌いで、いつも何回も何回も鳴らさないと出ないんです。それが今日は  
なぜかすぐ出て来て、何か予感がしたんですかね。色々話しました。詐欺に引っかけ  
っちゃだめだよとか、転ばないようにとか……。でも、急に別れが来ると、何を言っ  
ていいのやらわからないものですね。うまいこと喋れなくて……。両親は泣きなが  
ら、これが最後じゃないわよねって。

母 最後じゃないわ。

名古田 嫁は、そのうち私も行くしって笑ってました。強くて、面白くて、いい嫁なんです。

私は、連絡取れただけでも幸せです。それより……ちくしょー……田畑あ……。

辰人 また思い出してやんの。

名古田 サラリーマン人生で、やっと、やっと、私にもチャンスが回ってきたっていうのに……  
……。

持田 まあ前向きにいきましょう。

名古田 あんたはしがらみがないからそんなこと言えるんだよ！

辰人 もつちに怒ってもさあ。

名古田 わかってるよ！ わかってるよ……。

名古田、うなだれる。

持田 茂の母、さん。

母 なあに。

持田 あなたは何度もここに来てるんですよね？

母 ええ。

持田 教えてもらえますか？ いつもここを出る時は、何人ぐらい……。

母 そうね。一人の時もあれば、二人の時もある。三人の時もあれば、四人の時もある。でも、五人の時はないわね。

名古田 ……あんなにいっぱいの人が検査受けて、たったそれだけしか帰れないの？  
母 私はいつも、たったそれだけの中に入ってしまうの。

名古田と茂の母、溜息をつく。

持田 (辰人に) 相当の確率で向こう行きになりそうだね。

辰人 ……。

持田 いいのかな？ あのまま。(見張りの男の持っている封筒を指差す)

見張りの男、封筒を掲げる。

辰人 なんでそうやって出して持ってたんだよ。しまっとけて。  
男 はい。

見張りの男、封筒をカバンに入れる。

持田 今日の手紙はもう出したんだよね。あれは明日の手紙？

辰人 ……もし俺が向こうに行くことになったら出してもらう。

持田 明日以降はどうすんの？

辰人 俺、宇宙人になつてないような気がするんだよなあ。

男 そう思うことで解決しようとしてませんか。

辰人 は？

男 すみません。後悔してほしくないの。

辰人 ……。

男 時間、まだありますよ。

辰人 ……。

名古田 あっ。

一同、名古田を見る。

名古田 あ……。 (お腹を押さえ、もがく)

母 どうしたの？

名古田 (お腹を押さえて) いててて……いてててててて……。

母 お腹？

持田 大丈夫ですか？  
名古屋田 だめかもしれない……。

名古屋田、お腹を押さえ、もがきながら見張りの男の元へ。

名古屋田 痛い。

男 痛い？

名古屋田 お腹が痛い。

男 お腹が痛い。

名古屋田 うん……。

男 おトイレに行つて来ればいいんじゃないですか？

名古屋田 いてて……。(もがく)

男 痒いとは違いますか？

名古屋田 違う……動けない……。

持田 大丈夫ですか？

男 医者を呼びましょうか？

名古屋田 呼んで……急いで、お願い、いてててて……。

母 大丈夫？

見張りの男、ポケットから携帯を取り出す。と、名古屋田が奪おうと飛びつく。が、失敗。あつという間に見張りの男に取り押さえられる。

名古屋田 痛い！ 痛い！。ごめんなさい！ もうしません！ ごめんなさい！ ごめんなさい！  
い！

見張りの男、名古屋田を突き放す。

名古屋田 ちくしょー……。

辰人 ごだちゃん、ルール違反はだめだよ。

名古屋田 君に言われたくないよ！

持田 大丈夫ですか？

名古屋田 大丈夫なわけないだろ！ 私はお気軽じゃないし、身軽じゃないし、色々いっぱい抱えてるんだよ！

名古屋田、見張りの男の元へ。

名古屋田 お願いです！ 携帯貸してください。電話、したいんです。  
男 だめです。  
名古屋田 お願いです！  
男 だめです。  
名古屋田 お願いです！ この通りです！

名古屋田、これでもかというほど深々と頭を下げる。

男 だめです。  
名古屋田 ちくしょー……。  
母 ご両親に？  
名古屋田 いいえ。  
母 お嫁さん？  
名古屋田 いいえ……。  
母 どなたに？  
名古屋田 ……。  
辰人 あ！ 俺、わかっちゃった！

名古屋田、辰人を睨む。

名古屋田 そういう、人のデリケートな部分にずけずけと入って来るとこ、デリカシーのないとこ、ホント似てるんだよ。  
辰人 そんなこと言ったってさあ。  
名古屋田 (見張りの男に) お願いです！  
辰人 電話してどうすんの？  
名古屋田 うまく行ったかどうか、聞くんだよ！  
持田 (見張りの男に) 田畑さん。ちょっとだけ、だめですか？  
男 だめです。  
母 誰にも言わないから。  
男 だめです。どんなに頼まれてもだめです。  
名古屋田 田畑さん、お願いです！ 電話をさせてください！  
男 ……だめです。

それでも深々と頭を下げ続ける名古屋田。  
間。

辰人　ごだちゃん。俺、なるっか？  
名古田　……は？

辰人　宇宙人になったぐらいだ、田畑にもなれるぞ。

名古田　……おまえなあ——

辰人　名古田さん！ プロジェクト、成立したっす！

名古田　……。

辰人　俺、名古田さんの手柄全部もらっちゃいました！ すみませーん！ でも、これ、名古田さんのおかげっす！　ありがとうございます！　名古田さんの分も田畑、これから頑張ります！

名古田　……。

辰人　どうだ！

名古田　言わないよ、あいつは、そんなこと。

辰人　俺なら言うけどなあ。またいい企画思いついたら、連絡ください！　待ってまーす！

名古田、溜息をつく。

辰人　向こう言っても田畑になってやるよ。

名古田　いいよ。

辰人　遠慮しなさんなって。

名古田　終わったよ、今……終わったんだ……。ありがとう。

名古田、心決まったように溜息をつく。

名古田　まだある？

辰人　ん？

名古田　書きたいんだ。手紙。

辰人　ああ。封筒なら。

名古田　封筒だけ……。

辰人　うん。

名古田　まったく……。でも、少しわかったような気がするよ。何か理由があるんだな。どうしても手紙を送りたい理由が……。

辰人　考え過ぎだよ。

名古田　いいよ。封筒だけでも。

辰人、リュックから封筒の束、ペンを取り出す。封筒一枚とペンを名古田に渡す。

名古田、受け取り、ポケットから使い古した分厚い手帳を出す。

名古田 もうこれも必要なくなるな。

名古田、手帳のページを一枚破って何かを書き始める。それらにかぶせて、

母 どうやったら地球外DNAを持つことができるのかしら。

持田 ……。

母 ねえ、輸血ってどうかしら？ 宇宙人になった方から、あ、今あなたの血をいただくとか。

持田 輸血して亡くなった人、いるそうですよ。

母 そう。やめた。

持田 死んでしまったら、大事な茂さんに会えませんかからね。

母 なんでこんな時代になっちゃったのかしら……。

持田 ちょうどぶち当たってしまっただんですよ、こんな時代に。でも、世の中が落ち着いて状況変わったら、茂さんにも会える時、きっと来ますから。

母 いつのことやら……。

茂の母、宇宙人地区を見る。

母 母さん、大丈夫。一晩待機所に泊まって、明日には戻って来るからって言ったきり…

…。今、何してるのかしら……。ねえ、託したいわ、あなたたちに。

茂の母、辰人、持田、名古田を見る。

辰人、封筒を茂の母に渡す。続いて名古田が手帳から一ページ破って渡す。

母 ありがとう。

茂の母、書き始める。名古田も書き続ける。

それにかぶせて、

持田 「本日、何人の人が宇宙人になりました」って毎日ニュースが流れるだろ？ その

度に思ってたんだ。もしその時が来たら、僕は何を考えて、何をするんだらうって…

…。きつとこれまでのことが走馬灯のように駆け巡ったり、何かドラマチックなことを考えたり、すごく感傷的になるんだらうなって思ってた。けど、案外そうでもなかった。

持田、辰人を見る。

辰人 何。

持田 辰人はなぜお父さんに書留を送るのか。頭の中はそれでいいばいだ。

辰人 はは……。

持田 僕の中には存在しない、気持ちの行きどころのない何かがあるんだろうな、辰人の中に。

辰人 (笑って) ないよ。

持田 ないか。

辰人 ない。

持田 でも、お父さんにはあると思うよ。今日もあの手紙が来るのだろうか。毎日来てるのだから今日だけ来ないわけがない。そんな中で突然来なくなったら、それはそれで悩むだろうなあ。

間。

辰人 ニヶ月前なんだけど、親父、ぶっ倒れたの。

一同が辰人を見る。

辰人 頭強く打ったらしいんだよね。それがさあ、具合が悪くて倒れたのか、倒れたから頭

打ったのかわかんないみたいで、三ヶ月は注意しろって。また倒れるかもしれないから。

名古田 大丈夫なの？

辰人 今のところは。次倒れたら危ないらしいけど。

名古田 大丈夫じゃないじゃないか。

母 どなたかついてるの？

辰人 誰も。

名古田 一人？

辰人 うん。

母 お母さんは？

辰人 いない。

母 ご兄弟は？

辰人 なし。

母 あなたとお父さんと二人？

辰人 そ。尋問かよ。

母 じゃついてあげなくちゃ。

辰人 俺、追い出されたんだよね。二度と戻ってくんなくて。

母 そんな言葉気にすることないわよ、親子なんだから。

辰人 茂の母はね、茂の母だからそう言えるの。辰人の父は辰人の父なんだよねー。怖いよー。すぐ怒る。手が出る足が出る角が出る。血も出る骨も出る内臓も飛び出る。体あちこちぐっちやぐちや。家の中もぐっちやぐちや。親子関係もぐっちやぐちや。どうだ！ って感じ。

名古田 どこまでホントなんだよ。

辰人 俺の名前聞いただけで血庄ぐーんと突っ切ってくんだって。名前だけでだよ？ 笑  
っちやうよね、ははは……でも、そんな親父でも生きてほしいじゃん。だから、書留。

持田・名古田・母 （それぞれに）え？

辰人 書留、ハンコもらいに来るだろ？ 郵便屋が……。土日も関係ないし……。もし親父が倒れてても、見つけてくれんじやないかって……。

持田・名古田・母・男 （それぞれに）あ……。

辰人 最低だろ、自分の親なのにさ……。

名古田 わかってんだ。

辰人 わかってるよ。でもさ、電話しても俺だってわかったら出ないし、家行きや怒鳴られるし……。昔から仲悪かったからね。今さら心配しても嘘っぽいだろうなあ……。

周りからもよく思われてないから友達もないし、親戚も寄り付かないし、きつと倒れてても誰も気が付かない。見つかった時には白骨化だよ。ほんと嫌われモンなんだ。郵便屋ともバトル繰り広げてんじやないかなあ。おまえ、こんなモン持って来んじやねーよとか言ってる。郵便屋にとっても迷惑な話だよな。

持田 僕はちよつと違うなあ。

母 違うって？

持田 初めはね、(中央に出て)「三輪さん」なんだ「郵便局です。印鑑お願いします」  
「印鑑？」「はい、書留です」「書留？」「お父さんは印鑑を持って出て来て、押す。」  
「どうもー」郵便局員は帰って行く。お父さんは封筒を見る。「ん？ 名前を書き忘れてるじゃないか。どこのどいつだ」お父さんはブツブツ言いながら封筒を開ける。そして中を見て、「ええ？ 空？ なんだよ、入れ忘れてるやがる。バカだねーこいつ」  
まあ、こんな感じかな、初めはね。で、

名古田 (手を挙げて) はい、続きは私が。

持田 あ、ごださん。

名古田 いいですか。

持田 あ、どうぞどうぞ。

名古田 その一週間後。(中央に出て)「三輪さん、書留お願いします」「もう、またかよー」

「すみません」お父さんは面倒くさそうに出て来て、封筒の裏を見る。「また書いてない。もうこんなのが一週間だぞ。どうなってるんだよー」お父さんは苦々しく思いながら印鑑を押す。「どうなってるんでしょうねー。ではまた来ます」郵便局員は走り去る。「またってなんだよー」お父さんは怒鳴る。そして封筒の中を見て、「ちくしょー……」

辰人 それはごだちやんでしょ。

持田、茂の母、見張りの男、笑う。

名古田 でも、その二週間後。

母 (手を挙げて) はい。

名古田 え？

母 そこからは私が。

名古田 え、でも、

母 私に任せてください。

名古田 あ……はい。

持田 では、茂の母さん、どうぞ。

母 それから二週間後。(中央に出て)「三輪さん、書留です。印鑑お願いします」郵便局員が来ます。お父さん、やれやれと思いつながら出て来て、「今日はあんたか。昨日はあいつだったよ。明日は誰だろうなあ」「ああ、明日も私が来ます」「ああ、あんたか。そうか。毎日ご苦労だな。鰻頭でも用意してやるか」どうかしら、こんなのか？  
ああ、茂の母さんらしくいいんじゃないですか。

辰人 はあ？

名古田 私もそんな風に思っていました。

男 (手を挙げて) はい。

持田 お、田畑さん。

男 私もいいでしょうか。

持田 はい、どうぞどうぞ。

男 それからまた二週間後。(中央に出て)「三輪さん、書留です。印鑑お願いします」お父さん、印鑑と鰻頭を持って出て来て「申し訳ないなあ。郵便さんに毎日毎日」「いいえ、郵便物を届ける。それが私の仕事です。あなた宛ての手紙が届く限り、私は明日も明後日も、ここへ来ますよ」「そうか、ありがてえ」って、どうですか？

名古田・母 おお。

持田 仕事人の田畑さんらしいですね。

男 まあ、はい。

持田 (手を挙げて) はい。そして今。(中央に出て)「郵便局です。印鑑お願いします」

お父さんは笑顔で出て来る。「今日も名前なしか」そして印鑑を押す。そして封筒をじつと見て言う。「なあ、郵便さんよお。ちょっと前から思ってたんだが……これ、息子からじゃねーかなあ」「ほう、息子さん。どうしてですか?」「うん、この書留。一日……」

男 519円です。

持田 「519円だよ? これが一ヶ月で、」

男 15570円。

持田 「だよ。それが今二ヶ月。安い金額じゃねーだろ。こんな金をかけて、こんな悪さする奴は、あいつしか思いつかねーんだなあ。字だってさあ、二ヶ月も見てりゃわかるよ。わざと変えてはいるが、こりゃあいつの字だな。へへへ。俺を騙してるつもりだろうが、まあいいか。騙されたふりでもしてやるかってね、思ってたんだよ。ははは」そしてお父さんはその一枚を、これまでの封筒の束に、そっと加える。こんなのだろうか?

辰人 はは……、なんでもいい方にしか考えないんだな。

持田 そりゃそうさ。人生っていうものは肯定しながら進めるんだ。

名古田 おお。

持田 進むんじゃなくて、進めるんだよ。

名古田 自ら肯定して自ら進める……うん。

持田 まあ、そんなに簡単じゃないですけどね。ただ、どこかで迷った時に、そう切り替えようとする気持ちがあれば、救われることもあるかなって。

母 あなた、若いのに色々考えているのね。

持田 知らない国に行くでしょ? 「面倒だったたり、怖いことがあったり、もう二度と来るもんかって思うんですけど、でもあとになるといつも思うんですよ。ああ、行ってよかったんだなって。結局、その時の気持ち一つなんですよね。良くもなる。悪くもなる。だからきつとあそこも……。」「(宇宙人地区の方を見る)

持田、名古田、茂の母、見張りの男、宇宙人地区を見る。

母 さ、手紙、書かなきゃ。

名古田 私もだ。

名古田、うつむいている辰人を見る。

名古田 おい。

辰人 (名古田を見る)

名古田、手帳をページ破り、差し出す。

辰人 何書くんだよ。

名古田 なんでも。

名古田、ページを辰人に渡す。辰人、受け取り、  
間。

辰人 ごだちゃん。

名古田 ん？

辰人 サンキュ。

名古田 な、なんだよ急に……。気持ち悪いなあ。

母 ごだちゃんって可愛いわね。

名古田 辰人くんが。

母 いいお名前ね、

名古田 ごだちゃんのとこが。

母 あら、らしくてよ。

名古田 何がうれしいんですか。

持田 僕はもちいで。

母 もっちいさん。あなたもらしくてよ。

持田 ありがとうございます。

母 皆さん、前からお友達なの？

達也・持田・名古田 (それぞれに) いやいやいや。

辰人 ンなわけなっしょ。

持田 ここでさつき出会ったばかりです。あ、あの人は田畑さんです。

名古田 田畑あ……。手紙書かなきゃ。(書く)

母 あなた、田畑ってお名前だったのね。

男 はい。

母 これからもよろしくね。

辰人、名古田、茂の母、書く。

それにかぶせて、

男 あなたは？

持田 僕はしがらみのない人間ですから。

男 そうですか。

持田 でも、向こうに行ったら作るつもりです。  
男 はい？  
持田 家族。  
男 ああ、いいですね。  
持田 家族を作って、一緒にピアノを弾く。田畑さん、ご家族は？  
男 犬が一匹。ヨシヒコといます。  
持田 ああ、いいですねえ。  
男 はい。

名古田が見張りの男の元へ。封筒といっしょにお金を渡す。

名古田 おつりは結構。よろしくお願ひします。書留じゃなくていいです。  
男 はい。明日、出しておきます。  
名古田 はい。……ちよつと覚悟ができました。まだ怖いけど……うん、まあ、まああです。  
男 それはよかった。  
持田 一緒に楽しみましょう。  
名古田 あ。  
持田 どうしました？  
名古田 また痒くなってきました。(首を掻き始める)  
男 薬が切れましたかね。中では、痒み止め打ってもらえますよ。  
名古田 (掻きながら) あー、やっぱり私は宇宙人になってしまったんだ……。やっぱりいやだよー……。人間がいいよ……。地球人がいいよ……。ちくしょー、田畑あ……。掻く)

茂の母が来る。

母 往生際悪くてよ。(持田に封筒を渡して) 茂に会ったらお願いしますね。  
持田 はい。  
母 どうか向こうで仲良くしてやってください。  
持田 はい。  
母 私もいつか必ず行くからと……。  
持田 大丈夫です。会える時が来ます。  
母 あ。  
持田 ん？  
母 (左肘を掻き始める) なんか……。痒い……。

名古田 うつつた？

男 うつりません。

母 (搔きながら) でもなんか私、これまでの痒みとは違う痒みが……本当に痒いわ。痒い！ いやだ、こんな痒みが続くの？

名古田 (搔きながら) でしょ？

男 痒み止めを打てばおさまりますよ。

母 痒み止めが切れたら？

名古田 だから、痒いんだって！

母 こんなに痒いのいやだわ！

持田 でも宇宙人になりたいんですよね？

母 そうだけど、この痒みはいや！

持田 あ。来た。(指を搔き始める)

名古田 やっぱりうつるんじゃない？

男 うつりません。

母 ねえ、宇宙人になったら、この痒み、消えるの？

男 さあ。向こうでのことはまったくわかりません。情報、何も流れてこないのです。でも、やっと息子さんに会えますね。

母 でも、痒いのはいや。どうしましょう。

男 明日にはわかります。今はとにかく痒み止めを。

母 そうね。

名古田 はい、行きますよ。

母 ええ。

名古田、茂の母、搔きながら退場。

持田 痒い。辰人、僕も中入るよ。痒み止め。痒い。

辰人 相当来てるね。

持田 めっちゃ痒い。これはもう確実に宇宙人だね。

辰人 ねえ。

持田 ん？

辰人 怖くない？

持田、一瞬真顔になるが、すぐに笑顔になり、

持田 大丈夫。

辰人 (笑う)

『明日、宇宙人になります』

持田　じゃ先の中、入る。痒ー！

持田、笑顔で退場。

辰人、持田を見送り、書く。見張りをする見張りの男。

辰人、書き終えて、封筒を見つめる。そして見張りの男に手紙を渡す。

辰人　書留でお願い。

男　はい。書留で。

辰人、宇宙人地区を見る。

辰人　どんな世界が待ってるんだろう。

男　持田さんの言う通り、もしかしたらすごい世界が待ってるのかもしれないよ。

辰人　先では地球人より宇宙人の方が多くなったりしてね。

男　あり得ますね。

辰人　数年後には地球人の星じゃなくなってるかもなあ。親父も宇宙人になっててまた怒鳴られてるかもしれない。

男　あなたが宇宙人になってない可能性もまだありますから。

辰人　そしたら……帰るよ、親父に会いに。

男　そうですねー

辰人　あ……はは、来ちゃったよ……。 (ふくらはぎを掻き始める)

男　来ましたか。

辰人　はは……。俺も明日、宇宙人になるよ。

辰人、足を掻く。

見張りの男、カバンから名前のない封筒を取り出し、辰人に差し出す。

辰人　あげる。

男　え。

辰人　こんな男がいたって。

男　はい。

辰人　あ、別に捨ててもいいし。

男　(微笑む)

辰人　たばったちゃん。サンキュ。

男　お元気で。

辰人　たばったちゃんも元気で。

辰人、掻きながら退場。

見張りの男、見送る。

男

私はいつもこうやって、皆さんが宇宙人になって行くのを見送るんです。なんとなく、ここにいると、最後に残る一人になってしまいうので、なんとも……。本当に、奇妙な世の中になってしまいました。いえ、もっちいの言う通り、必然的になってしまったのかもしれない……え……。あ。

見張りの男、頬に痒みを感じる。頬に手を持っていこうとしたところで明かりが落ちる。

了